慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ナショナル・アイデンティティと言語的社会化
Sub Title	
Author	椋尾, 麻子(Mukuo, Asako)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.56 (2003.) ,p.137- 139
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成14年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000056-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ナショナル・アイデンティティと言語的社会化

椋　尾　麻　子*

私たちは，自らを形容，規定することばをどのように知り，使い，表現するにいたるのだろうか。またその語彙はいかにして生み出され，流通し，消費されるのか。私の関心は，個人のアイデンティティと社会との関係を，言語/言説を媒介として考えることにある。とりわけ，近年の教科書問題，教育基本法改正などをめぐる議論や，たとえばサッカー・ワールドカップの際に典型的にみられた擬似的な(？)ナショナリズム現象，あるいは日本に暮らす外国人の増加やそれにともなう教育課題の浮上などといった諸事象を鑑みると，個人のアイデンティティと「ナショナルなるもの」との関係に焦点を当てることには一定の意義があるのではないだろうか。以上のような関心のもと，(日本における) 教育および社会化の過程を，ナショナル・アイデンティティの構築/再構築のプロセスとして考察することが，本研究の目的である。本研究では，先行研究の理論的検討および具体的な事例などに基づく実証とのいずれをも企図しているが，現段階ではまだその途上にある。本稿では，前者の理論的な部分を中心にその経過報告を行なうとともに，後者を含めて今後の課題を提示することとする。

私の理論的方策として，主にカルチュラル・スタディーズの視座を，従来のアイデンティティ論あるいは社会化論，ひいては文化論に取り込んで/介入させていくことを構想している。カルチュラル・スタディーズは，ポスト構造主義，ポストモダニズムと並び，いわゆる言語論的転回以降の思潮を背景として，主体の言語的な構成/脱中心化を論じる諸実践の総称である。

最近では，カルチュラル・スタディーズの限界や問題点について多くの指摘がなされつつあり，私もそれらに部分的ではあるが同意するものである。また，社会化という人間形成のプロセスを脱構築的/批判的にみる，ということには，可能性のみならず困難もともなうであろう。私見では，教育とは非常に「近代的な」営みである。だからこそ，従来の教育社会学での社会化論とたとえば構造機能主義とが適合的，融和的であったといえよう。だが，それもまた見方を変えれば「近代的な」言説戦略（の産物）ともいえる。しかも，グローバリゼーションの進展のもと，個人（のアイデンティティ）および社会の双方が揺らぎ，再編成されていくなかで，もはやそうした従来の理論のみでは立ち行かなくなってもいるのではないだろうか。その意味で，この方略は議論の閉塞感を打破するひとつの手段となりうるのではないかと考える。

本研究においてはその端緒として，英国のカルチュラル・スタディーズの中心人物と目されているスチュアート・ホールの「アーティキュレーション articulation」概念およびその応用可能性を検討した(『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第 55 号掲載論文)。その議論の概略について，以下述べていきたい。

ホールにおいて，アイデンティティとは，けっして固定的なものではない。主体が自らを取り囲む諸言説の網の目に節合（アーティキュレート）した縫合の点なのであり，そこに位置取り (*positioning*) をする過程なのである。ここで概念化される「アーティキュレーション」は，第一に発話行為そのもの，言語行為や表現そのものであり，第二に，特定の条件下で，異なる要素（特定の概念や理論，運動，あるいは集団や諸個

人など）同士を統合することができる連結の形態であるという，二重の意味合いをもっている。そしてそのつながりは，いかなるときにも常に，すなわち「非必然的な照応 *no necessary correspondence*」とされている (Hall 1985, 1996: 14＝2001: 29; Grossberg 1996: 141＝1998: 33-)。

ホールがその所論の展開においてアイデンティティを重要視するのは，それが単に個人の主観的表象にとどまらないと考えたからに他ならない。ホールは，記号論などを流用し，記憶や神話などといったさまざまな言説実践，言語行為，意味作用のプロセスにおけるポリティクスを焦点化している。つまり，ホールは広い意味で，社会が言語的に構成されているという視点をとり入れながらもなお，歴史を背負い，歴史をかたちづくる「主体的なもの the subject」にこだわりつづけている（吉見 2000: 21）といえる。かくして，アイデンティティの非本質性と，社会的規定性をどのようにとらえるかが問題となる。

ここでは，「歴史的種別性 historical specificity」と「節合の要素」との，二つの論点を指摘しておきたい。ホール自身が述べるように，あらゆる表象，言説は，その「歴史的種別性」から「切り崩すのが非常に困難な傾向性の磁力的な配列」に構成されている (Grossberg 1996=1998)。つまり諸言説の「網の目」は，けっして均質的なものではないのである。したがって，ある個人の行なうアーティキュレーションの可能性は無限に開かれているわけではない。そこには一定の傾向があると指摘できるのだ。この歴史性を鑑みると，ナショナル・アイデンティティ（およびそれをめぐる諸言説）の堅牢性もうなずける。

さらに，先述の歴史性を鑑みたとき，節合される「要素」を所与のものとみるべきではないことが推し測られる。むしろ，この「要素」自体，アーティキュレーションによって事後的に了解可能なものとなることを看過してはなるまい。つまり，アーティキュレーションは，もともと存在する要素を結びつける過程ではなく，要素を産出する過程なのだというダイナミクスをとらえるべきなのではないか。この点はホール自身が殊のほか強調しているようには見受けられず，逆に「要素」という表現から誤解を招きかねないのだが，「アイデンティティは，言説の外側においてではなく，内側において構築されるものである」(Hall 1996=2001: 13) というホールの主張を適切に汲み取るべきであろう。

確かにホールのアプローチは，構造機能主義と解釈的パラダイムを弁証法的に媒介し，新たな視座を開く可能性を有している。だがそれゆえに，上の論点にみた通り，その理論はアンビヴァレンスでもあることを確認した。

今後は，これまでの言語的社会化論との接続，もしくはその相違を論ずることが課題となる。ここでは，教育社会学で既に指摘されている，社会化とは年少期などの一時期に限定される過程ではないという点が，ホールの議論と照らしても明らかであるということのみ，今後の実証のためにも明記しておきたい。

以上のような理論的検討を踏まえ，具体的事例として，現在は「日本語論」といわれる諸言説の分析を試みている。近年また盛んに出版物が流通し，議論されている「日本語論」だが，それらはいわゆる「日本人論」の一分野と端的にみなされているためだろうか（無論そうした側面もあるのだが），あるいは別の理由からか，それ自体のメタ的な分析は管見によればまれである。また，その論調は，「正しい」「美しい」日本語へのノスタルジーに傾倒したもの（時にそれはナショナリズムと結びつく）や，逆に「想像された」日本語の虚構性を暴き脱構築しようとするものなどに大別されようが，それらは一括りに「日本語論」として受容されているようである。そこで表出される「日本語」とはいかなるものなのか

(先のアーティキュレーションの議論でいえば，これが要素にあたる)。またそれはどのような効果を持ち，ナショナル・アイデンティティの構築/再構築に影響しているのか，論証していきたい。分析の際には言説それ自体と同様に，あるいはそれ以上に，それら言説の消費のありようを追っていく必要があるだろう。言説＝イデオロギー分析の方法論の検討も含め，現在作業を進めている。

さらにそれとも関連した理論的な課題として，「母語」なるものについて語ることの困難が指摘されよう。とりわけ自らの母語で，母語について語ることの難しさとその意味はいかなるものなのか，という問いを念頭において分析を進める必要があると考える。

引用・参考文献

Grossberg, Lawrence ed., 1996, "On postmodernism and articulation: An interview with Stuart Hall," Morley, David and Chen Kuan-Hsing eds., 1996, *Stuart Hall: Critical Dialogue in Cultural Studies*, Routledge. ＝1998, 甲斐聰訳「ポスト・モダニズムと節合について――ステュアート・ホールとのインタヴュー」『現代思想』26(4): 22-43。

Hall, Stuart, 1996, "Introduction: Who Needs 'Identity'?," Hall, Stuart and Paul du Gay eds., 1996, *Questions of Cultural Identity*, 1st edition, Sage Publication. ＝2001, 宇波彰訳「誰がアイデンティティを必要とするのか？」宇波　彰，柿沼敏江，佐復秀樹，林　完枝，松畑強訳『カルチュラル・アイデンティティの諸問題（誰がアイデンティティを必要とするのか？）』大村書店: 7-35.

――――, 1985, "Signification, Representation, Ideology: Althusser and the Post-Structuralist Debates," *Critical Studies in Mass Communication* 2(2): 91-114.

吉見俊哉, 2000,『思考のフロンティア　カルチュラル・スタディーズ』岩波書店.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

近代日本における「読む」行為と人間形成

―明治後期から大正中期の女性を視点として―

山　梨　あ　や*

研究の概要

本研究の目的は近代日本における「読む」行為と人間形成の関連について，明治後期から大正中期の女性を視点として明らかにすることである。平成14年度は，社会教育の成立過程において人々の「読む」行為を組織化する理念と実態を，図書館の果たした役割に注目して検討する作業を行った。2002年10月5日に開催された日本社会教育学会においては，1908年（明治41）に開館した東京市立図書館を対象として，図書館業務に携わった今澤慈海の理念とその実践について報告した。以下，本年度の研究成果として上記学会発表の内容を要約する。

はじめに

本研究は社会教育成立期における図書館の実践を明らかにし，社会教育史における位置付けを検討することを目的としている。倉内史郎は『明治末期社会教育観の研究』において図書館事業が教育，人間